

花匂う

上野介正信

新潮社版

花句う

上野介正信

山本周五郎全集

第二十一卷



© Kin Shimizu
Printed in Japan 1983



外箱図・「裂織丹前」部分
本扉絵・乾山「絵替土器皿」より

山本周五郎全集第二十一巻 定価一六〇〇円

はなにお
こうづけのすけまさのぶ
花匂う・上野介正信

昭和五十八年十二月二十日印刷
昭和五十八年十二月二十五日発行

著者 山本周五郎
やまもとしゅうごろう

発行者 佐藤 亮一

発行所 株式会社新潮社

〒一六二 東京都新宿区矢来町七一
業務部(03)二六六―五一一 編集部(03)
二六六―五四一 振替 東京四―八〇八

印刷所 錦明印刷株式会社
製本所 大口製本株式会社

乱丁・落丁本は小社通信係宛送付下さい。
送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-644021-0 C0393

目次

椿説女嫌い	五
失恋第五番	三
失恋第六番	四
山　　椿	九
柘　　榴	五
老　両千両	七
うぐいす	二七
古い檜木	二九
青　　嵐	三三
上野介正信	三七

真説客齋記	一八三
人情裏長屋	一八六
花句う	二一八
蘭	二三四
合歡木の蔭	二四四
おしゃべり物語	二五八
山茶花帖	二九四
山女魚	三二五
附記	三三七

花匂う・上野介正信

椿説女嫌い

一

「どなたが新しい御勘定奉行ですか」こういう雅びやかな問いかけの言葉を以て感動すべきこの小さな物語は始まる。——江戸から赴任して来た折岩弥太夫が、勘定奉行の事務を執り始めて二十七日、奉行役部屋で依田記元、樫駒市太という二人の秘書役と、予算計表の吟味をしていたときこう呼びかけられた。振返ってみると太鼓張りの仕切り障子の所に若い婦人がひとり立っていた。「奉行だがなにか——」「貴方ですね、——」こう云いながら若い婦人はさつさと側へやって来て弥太夫を睨みつけた。「長局の畳替えをするように書出したのを貴方が断わったというのは本当でしょうか」弥太夫は筆を持ったままむっとしたように相手を見た。不機嫌なぶつきら棒な調子でこう答えた。

「——そんなことはありません」「でも局では三度も折返し申入れたのに三度も断わられたと云っていますよ」「間違いですねそれは、断わるなんていうことは決してありません」「では畳替えはして呉れる訳なのですか」「だめです」弥太夫は冷淡に頭を振った。「絶対にいけません」「貴方は寝ぼけているんですか、それとも謎なぞ遊びでもする積りですか、現に今断わりはしないと云ったでしょう」「断わりなんかしないからしないと云ったんだ」弥太夫の額に癩癪筋が立った。

「初め書上が廻って来た時に、十年儉約の思召の出た折だし、表でも諸用切詰めているから、畳替えの簡条は削るようにと注意した。ところが是非やって欲しいと云って来た、再考したらどうかと答えたらまた来て御上臈だか老女だか臍を曲げてどうかしたとかしなないとか絡んだことを云う仕方がないから時節をよく考えろと叱り飛ばしてやったんだ、断わったんじゃない叱り飛ばしたんですよ」「——わかりました」若い婦人の額がさつと白くなり、怒りの双眸が燐のように光った。「それが勘定奉行の意見なのです」「そうですね。勘定奉行折岩弥太夫の意見です」「有難う——」婦人は蔑された誇りのために声が顫えた。「では念のために名乗って置きましょう。わたくしは老女の波尾ゆうという者です」「ははあ——」「何ですって」「なんでもありません。唯ははあと云っただけです」「失礼な」波

尾という婦人は右の足でとんと畳を打ち「なんという無礼な、唯物的な野蠻人だろう」こう叫んで廊下へ出ていつてしまった。寧ろあつけにとられて、弥太夫が見送っている、依田記元が頭を揺りながら大変な事をしましたねと云った。「何がどうしたって」「あの方を怒らせてはいけなかつたんです、そんな法は絶対にありません、その位なら蝮蛇でも踏むほうが安くつきますよ」「高くつたって値切りあしねえ、江戸っ子だ」弥太夫は奉行職には不似合な口をきいた。「それよりあのおかちめんこはなんだ、あれでも雌だろう」「御婦人ちゅうの御婦人ですよ」樗駒市太が敬うやしく答えた。「女ならどうして表へなんぞ出て来るんだ、此処では表と奥の区別もないのか」「区別は有りますけれどあの方は別格です。あの方だけはですよ」「そうなんです」依田記元も警告するように口を添えた。「あの方に触つてはいけません、見ず聞かず云わずに限ります。どんな事があつてもですよ、さもないと——」

閻魔が逆立ちをして頼みに来たって女なんぞに触るもんか、ばかにするなと弥太夫はそっぽを向いた。彼の女嫌いは江戸屋敷で知らない者はない。それは二千石の老職の二男に生れ、二十六歳で勘定奉行になった現在でも、妻を持たない許りか召使にも女を置かないことが証明している。こう申せば訳知りの紳士派方は会心の微笑を洩して頷ずくだろうし、御婦人達は皮肉に眼を見交わして「きつと二た

眼と見られない醜男なんぞますわ」とか「いいえ、尊とい物が片輪ざあますわきつと」などと敦圀くに違いない。然し弥太夫は美男ではなかったが醜男という程でもない。背丈も五尺七寸はあるし、がっちり肉の緊った軀つきで、面長のふつくりした顔だちには、育ちのよさからくる暢びた上品さと二男坊の負けぬ気性が、一種の清すがしい調和をみせている。女嫌いの欠点さえなければ相当な男前と云つてもいいだろう。彼は「女は臭くつていけない」こう云つて鼻をしかめる。「おまけにお饒舌りで意地が悪くて捻くれてる。もう死んでしまふなんて泣き喚いた後でけろりと汁粉を食っている痴者だ、絶対にいけない」そして彼は手を振るのである。これらの言葉には未婚者のよく知るべからざる部分があり、その点いささか筆者としては当惑に耐えないが、物語の性質からこのまま話を進めるとしよう。

二

秋晴れの静かな日であつた。久し振りの非番で朝寝をした弥太夫は風呂から出ると酒を飲んでゐた。その家は間数こそ少なかったが庭が広く取つてあり、隣り屋敷との仕切り塀に添つて椎木が柵のように枝葉を茂らせているし、他にも松だの楓だの杉だの梅だのがたくさんある。障子を明

け放して庭の樹々を眺めながら、自由解放不拘束の寛ろぎを楽しみつつ、弥太夫が悠くり盃をあげていると、江戸から付いて来た家僕の阿波照蔵が「お隣りからお使いがみえました」と取次ぎに来た。「何だ朝っぱらから、お前聞いて置け」「御主人にと云つております、きつと先日のごことでしよう」「庭の樹か、——」弥太夫はふんと鼻を鳴らした。つい五六日まえに隣り屋敷から使いで、自分の方の庭が日蔭になるから仕切り堀に沿った椎木の枝を払って呉れと云つて来た。払つてやつてもいいのだがその時挨拶がいやに権高だったし、隣り屋敷というのが娘沢山な家庭らしく、おまけに図抜けた自由主義者とみえて、琴だの鼓だの笛だのむやみにじゃんぱんぼこびいびきやるし、庭では鞠だの鬼ごっこだのきやあきやあげらげら大騒ぎを展開する。うるさくつて仕方がないけれど此方は新参だから我慢していた。そういう関係から「枝を払う訳にはまいらない」と答えさせたのであった。「ふん」弥太夫はもういちど鼻を鳴らして「よし俺が出てやる」と立上った。玄関に待つていたのは女であつた。年は三十二、三で色の浅黒い、高慢を鼻先へぶら下げた顔つきである。男を觀賞する場合容貌より先に体格を見る年齢にあつた彼女は現われた弥太夫を見るなり鼻へぶら下げた高慢をひき千切り全皮膚面に嬌羞の癡癡を見せながら斜交いに会釈した。弥太夫は愕然とした様である。それも余程あわてたとみえて「おまえ仇

吉か」などと意味分明の失言をした位であつた。その婦人は弥太夫の還ましい軀に羨望のながしめを呉れながら「隣り屋敷の使いでございますが」と作り声で云いだした。この作り声が弥太夫の我慢の緒を切つた。彼は無作法にも手を振つて「ああだめです。だめです。お帰りなさい、決して枝は切りませんから」と云つた。使いの婦人はみるみる顔色が変わつた。「随分失礼な御挨拶ですこと、私まだ用件も申しておりますわ、それなのにいきなり手を振るという作法がございましょうか」「それでは女を使いに寄来すのは作法か」「この前ちゃんと男を遣わしました」婦人は冷笑して云つた。「けれども男では役に立たず、埒が明かないから私が参つたのです」「男では役に立たない——」弥太夫はかつとなる氣持を辛うじて自制し、「宜しい、それでは改めて用件を聞きましよう、何です」「いえ、私はそんな無作法な方とはお話しができません、どうぞ御主人にお取次ぎ下さい、御勘定奉行ともある方なら礼儀も御存じでしようし、少しは物の道理もおわかりでしようから」これが主じと解りきつての意地悪である、女性が一度こう曲つたら、男性は無条件降伏をするか鉾を担いで退却する以外に手はない、弥太夫は物をも云わずに退却した。

部屋へ戻つて坐つたが、もはや寛ろぎどころか、胸は食傷したように塞いでしまふし、頭は脹れあがる毒急で沸き返る様だった。——ええあの女の野郎、こう舌打をした時

である。庭の正面で突然きやあきやあという女の笑い声がり「おかちめんこ——」という叫びが聞えた。弥太夫も驚いたが家人達はなお吃驚して、飯炊きから下僕、五人の家士達迄が庭へ飛びだして来た。そこへ椎木の梢越しに白い妙な物が飛込んで来て、皆の見ている前でこんころと弾み転げ、堀の向うで百枚の生絹でも裂く様な派手な叫びがきあーつとどよみあがった。耳がきんきんする様な凄まじい叫びだ、呆氣にとられていと更に驚ろいたことに、堀の上へ若い娘が一人攀登って来て「その蹴鞠を取ってたもれ、おかちめんこ殿」と呼びかけた。途端に、こんどは弥太夫ひとり驚いたのであるが、若い家士達はその蹴鞠へ飛びつき、奪い合いをしたうえ一人が拾って、「御免」と云いながら堀の上の娘へ伸上って手渡しにした。娘はあでやかに笑い、ながしめを呉れながら「また頼むぞや」と云った。

三

「何という、貴様達は——」こう呶鳴りかけて弥太夫は口を噤んだ。「仇吉か」などと口走る位だから彼も唯の木念仁ではない、若い家士たちが蹴鞠の奪いあいをし、喜び勇んで捧げ奉ったのは、偏に艶やかな人間の衝動に因るものである。この衝動たるや貴賤貧富智愚善惡を超越して随

時に人間を捉え、これを思う儘に支配操縦して飽くことがないのである。

「こいつは弱った」部屋へ戻って坐ると、こう唸って弥太夫は腕組をした。あの馬鹿馬鹿しいきやあきやあ騒ぎや蹴鞠の投込みは、椎木の枝下しを拒んだのと、さっき来た女の使いを怒らせたのに対する厭がらせである。捨てておけばこれからも繰返してやるに違いない。然もこちらの家来共が艶やかな衝動の虜となり、寧ろ喜々として翻弄の餌食になろうとしている。これは弥太夫ならずとも困った事態と云わなければなるまい、唯一の方法は椎木の枝を下すのであるが、事ここに及んでは輕侮をかうだけだろうし、とにかくどこまでやるか暫らく容子をみてからだ、こう思つて彼は一応自分をなだめたのであった。

国老の鎌谷千兵衛に呼ばれたのはその翌日のことである。この人はもう六十四で、ひどく暢びりした温厚な性分の癖に吃ると、ずぬけた好酒家として名が有った。役所へ出て若い頃のことだが俱利院という殿様が「お前はいつも赭い顔をしているがどうしたのだ」と仰せられたら「これは幼少の折患つた赤痢瘡の故でございます」と即答した逸話がある。——千兵衛老人は恒例の茶代りの酒を飲んでいたが「ああ」「うう」と二、三ど云い感つたあとで「その、あれだ、その、長局のだな、長局のあれを、なにしてやれ」「——」まだあるのかと弥太夫は待つていた。国老は、

土瓶の液体を茶碗に注いでぐつと飲み、ちらとこつちを見て「それだけだ」と云った。弥太夫にはとんとわからなかった。「察しの悪い男だな」千兵衛はまた茶碗を取った、「その、長局のだ、あれを、詰り疊をだな、そのう」「いけません、お断わり申します」弥太夫は眞面目に頭を振った「あれは十年儉約の思召に反きますし、黒書院でさえ中止した位なんですから、長局なんぞもっての外の沙汰です」「それはわかつておる、けれども、長局は別だ。長局は」老人はぐつと例の茶を呷り、「たとえお天守の崩れたのを修繕できなくとも、長局の疊替えはしなければ、ならない。それは、詰るところ、そういう仕掛けなんだから」「私にはまるで理解が付きません、どうしてそんな」「理解なんぞ誰にだつてつくものか」千兵衛は茶碗に液体を注ぎそれを呷りつけた。「こんな所へ理解だの修理だのを持出すのは、砂をこねて飴を、いや、馬術を習つて魚を釣る、いや待て、その犬をとらえて論語を——詰り、面倒くさいから一口に云えば、長局の疊替えはしなければならん、理由は唯一つ、女共がそうしたいと云えばしてやるほかに手はない、いいか、女に触るな、そのくらいなら疊替えの方が余程安くつく、わかつたか」「宜しゅうございます、疊は替えさせましょう」弥太夫はこう答えた。「その代り御目見以上の御扶持から費用の半分を差引きます、どうかそう御達し下さい」そして彼はさつさと立つて来た。実際の

ところは予算計表の案配でそうまでしなくとも費用の出しようはあつたのであるが、赴任して来て調べたところに依ると、奥向の歳費はこれまで格外に多かつたし、殊に目見以上の者の扶持外公費が眼立っていた。これは幕府はじめ大藩諸侯に共通する問題であるが、藩主の夫人や側室を擁する「奥」の勢力は非常なもので、これら女官達の好意と支持を得なければ政治の運営もうまくいかなかった。この藩は国許にも可成りな規模の「奥」があり、女官長たる御上臈は京の某公卿から来ていたし、老女、中臈、若年寄、右筆、表使、御次、呉服などの目見以上が十二人。三之閨、末がしら、中居、使番、火番、膳所番、茶所、子供、端下などという目見以下の者三十余人、殆んど江戸屋敷と同じ組織をもっていたのである。

これは不均衡であり不正である。男女は同権でなければならぬ。たとえ封建伝統の世なりとて、男も人間であつてみればそうそう女の専權に屈伏してはいられない、弥太夫は男權確立のために戦う決心をした、「疊替え拒否」は実にその第一着手だつたのである。

城を退つて家へ帰ると、庭のほうで何かけられから笑い騒ぐ声がする。着替えをしながら家僕の阿波照藏に何だと訊くと「お隣りで風を揚げた所、それが椎木へひつ掛りましたので、今みんな取っているところでございます」「風だつて、此処では十月に風なんぞ揚げるのか——」こう云

いながら縁側へ出ていってみた。

四

椎木のいちばん高い一つに三人の家士が登っていた。糸と凧とそのばかり長い尾を分担して、引張ったり手繰ったり、撓めたりしている。それにつれて塀の向うから若い女の声で「糸をそっちへおまわしなさいな。右から引いて枝に掛けて、ええそうそう」などと指揮するのが聞える。「あら、何て不器用なんでしょう、もつと頭をお使いなさいな、そっちから引いたら糸が切れてしまふでしょう、飛田さんは左へ谷津さんは下から、ええそう、それで北さんが右へ廻れば、ああ焦れたいこと右ですよ右」「おほほほほあの腰つき、北さんの腰つきを御覧なさいな」これは別の声である。「ねえ面白いでしょう、今に卵を生むから見ていらっしやい」成程北三之佐は卵でも産みそうな恰好である。思わず苦笑した弥太夫の顔はその儘すぐ忿怒の表情に変わった。「何をしているんだ」彼はこう絶叫した、「——降りろ」そして自分でびっくりした様に居間へ戻り、障子を閉めた。叱ってはいけない、彼等の艶やかな衝動は抑えると却って激しくなる、そう考え乍らつい嘔鳴ってしまった。ええ悪いまいと舌打をすると、後から入って来た照蔵がどうもお隣りには困りましたと云う、「御登城なさるとす

ぐに例のばか騒ぎが始まりました、蹴鞠の飛込むこと三ど、凧をひつ掛けるのがこれで二どめという次第です。これは椎木の枝を下さぬといかぬかも知れませんが」「ばかなことを云うな、あの木は俺が来て住む前からあの通り枝を張っていたんだ、本当に日蔭になって困るなら、俺の来る前に枝を下ろさせる筈じゃないか、ぜんたい隣りはどういいう人間なんだ、無闇にうようよ女ばかりいる様だが主じはなんというんだ」「門札には波尾とございますが、どういいう御身分でございますか、とんと——」「波尾だって」どこかで聞いた名前だと思つて色いろ記憶を繰つてみた。然しこの土地へ来て間がないし、まだ家中とのつきあひも浅いから思いだせなかつた。こうするうちに鑓田宮内という若い家士がやつて来た。「お隣りから——御主人にということですが——」「照蔵いってみろ、俺は病氣だ」照蔵は間もなく戻つて来て溜息をついた。「何だと云うんだ」「凧が絡んで取れないから椎木の枝を切らせて呉れという口上です」「ならんと云え、凧なんか千でも二千でもひっちゃぶくがいい、小枝一本切ることはならん、そう云つて追いつせ」照蔵はもう一度溜息をつきながら出ていった。弥太夫は夕食迄と思つて、役所から持つて来た仕事をひろげたが、それを待つていたかの様に、隣り屋敷の庭で突然例の騒ぎが始まった。何をするのか庭中右往左往に駆け廻つての大騒動である。「きゃあーわあつ」と嬌声が巻き上つて、こ

つんころころと庭へ何か飛込んで来た。そしてすぐに塀の上から「もしもしそこのおかちめんこ殿」と若い女の声が聞えた。「その蹴鞠を取ってたもらぬか——、ああいや梅の木の前から立った。そして照蔵を呼んで着替えをし、いきこんだ顔つきで家をとびだしていった。

彼は隣りへねじこむ積りだったのである。然し往来へ出て黄昏の色をみるとふいに気が変った。夕暮は郷愁の時である、子供は喧嘩をやめて母親のふところへ帰り、お祖母さんは嫁いびりを中止して仏壇へ灯明をあげる——弥太夫はいっさんに本町通りへ向い「曲水」という料亭へ入った。

——曲水はその城下第一流の家で、彼の為に奉行職達が歓迎の宴を張って呉れたことがある。向うでも覚えていたと見え、肥えた女主人がとんで来て「まあ、まあ」と連発しながら手を取らぬばかりに案内した。赤々と炭火の熾った火桶やかけ列ねた燭台、季節も時刻も詭らえたような条件である。少し酒が廻る頃に若い芸妓が三人ばかり現われた。弥太夫の顔を見るなり「あらあおーさまよ」「願が叶ったわあ嬉しい」「今夜は帰さないことよう」、これは曾ての歓迎の宴会で彼がどんな客振りを見せたかという事を証明するものである。「うるさいうるさい」弥太夫は手を振った、「みんな向うへいつて坐れ、おれは女が嫌いだ」「まあ憎らしい、どのお口でそんな」「いいから抓っておあげな

さいよ」「いっそこうしてあげましよう」三人が三方から掴みかかった。そこへ更に年増が三人、追っかけて婆さん芸妓が二人、次で若いのが三人また二人という具合で、忽ち座敷じゅう妓たちでいっぱいになり、「いやはや」「あたしべん様のお座敷をぬけて来たのよ」「どこからの貰いも断わって頂戴」「今夜は飲み明しましようよ」という騒ぎと相成った。

五

「あっちに難しい客があるから少しお静かに」女将が二度程そう云って覗いた。然し妓達の方が張切っていたし彼も酔っていた。「もういいでしょうおーさま、この間の猿と蜻蛉をお踊んなさいましな」「なに猿と蜻蛉だ、——」弥太夫は恠つとした「こつちにもあれが流行っちゃったのか」「貴方が見せて下すつたんですよ、相の手だけは覚えましたがまたどうぞ」弥太夫は唸った。あれを踊つたとすると歓迎の宴でどんな騒ぎをやつたか想像がつくし、妓達の度外れな押れ押れしさも合点がいく、「よし」弥太夫はくるくると帯を解いて（袴などはとくに脱いでいる）肌襦袢一枚になり、鉢巻をして前額のところを簪を二本挿した、「さあこれから鬼の掛取というやつを見せてやる、三下りにしてじゃんじゃんやれ。いいか」袴を括って紐で首

から下げた所で、女将がもう一度何か云ったようだったが、こっちはもう耳にも入らない。妓達が面白がつて三味線も太鼓もいっしょくたにじゃんじゃかとんとこ囃したてると、何の節とも知れない無闇に喚く様な声で、「取ろうよ取ろうよ、掛を取ってくりようよ、地獄も師走なれば閻魔の帳合——」寒丹前ちんたんぜんとでもいうのか足踏み鳴らして恐ろしく派手に踊りはじめた。その時である、——「叱っ叱っ」という女将の制止につれて太鼓が止み、次つぎと三味線も止んで、座敷は急にしんとなった。弥太夫だけ根太も抜けよと足踏みをし、「やあ取ろうよ取ろうよ、鬼こそ掛は取るべえ、ふん剣ぐべえ——」ここまで喚いてきてひよいと気がついた。見ると婆さん芸妓が頻りになにか手で合図をする。「うるさいうるさい婆あは黙ってろ、さあそっちの三味線、おいその三味、——」指さしてこう云いかけたが、その儘弥太夫は口を噤んだ。障子が明けてあり、廊下に誰か立っている。立ってこちらを眺めている。それが女で、三人もいる。これは無礼である。他人の遊興の邪魔をするなどとは実に非常識極まる——いや待て待て、弥太夫はあつと唸った。廊下にいる三人の中から、一人の婦人がにっこり笑って「折岩どのでいらっしやいますね」こう云ったのである。「たしか御勘定奉行の折岩弥太夫殿だと存じ上げますけれど」「やあ」彼の顔はくしやくしやになった。「やあ、どうも」「わたくしを覚えておいでですか」「たしか御老女

の」「老女の波尾でございます、結構なお噂なみを拝見致しました。大層お品のよい御趣味でいらっしやることね、——肌襦袢ひとつの裸で鉢巻に作り角をして、首から頭陀袋でうたを掛けて」こう云いながら彼女は弥太夫の頭から足まで眺め上げ眺め下ろした、「これはいったい何という舞でございませう、幸若でございませうか、それとも」「うるさいのねえ」突然こう云いながら立つて来た芸妓がある、二十四になる年増で、一座の中でもずぬけて美しい。酔っているとみえて嬌めかしく裾を糞しながら、するすると寄つて来て両方の袖を弥太夫の肩へ掛けるなりぎゅっと抱きついた、「おーさんはあたしのいい人なのよ、文句があるならあたしが伺いましょう、なにがお気に障ったか知らないが、あたしのいい人をそう虐めないで下さいな」「折岩さまが貴女の何ですって」波尾女史の血相が変った。こちらはあらん限りの媚笑で、「いい人、二世も三世も契つた、大事な大事な人なんですよ」と云いながら、抱いている男の顔へぎゅうと頬摺をした。女史は眼を吊上げながらも自らの誇りと尊厳を保つべく、「ははあ——」と冷笑した。「何ですって」「なんでもありませんよ、唯ははあと云っただけです、——折岩さま、悠くりお楽しみ遊ばせ、お邪魔を致しました」こう云って波尾女史は二人の同僚を伴れて立去った。

彼はべろべろに酔って帰った。「女という女を集めて来

い、ひと纏めにして火焙りだ、石子詰にしろ、逆さ磔刑だ、鋸びきだ、女を攻め滅ぼせ、一人も残さず生理めにしてしまえ、さあ合戦だ」と喚き散らすと着替えもせずによつ倒れて寝てしまった。——翌朝弥太夫の容子は苦悶と悔恨と自己厭惡とで身も世もあらぬ態だった。「奥女中が茶屋でいりすると驚いた」などと喧き、「こいつは秩序紊乱だ」などと声を怒らせたり、また呻いたりした。それでも苦い顔をしながら冷酒を少し許り飲んで、やがて着替えをしてふらふらと登城していった。

六

弥太夫は覚悟していた。かの女傑は必らず報復するであろう、問罪の刃で真向うから斬り込むに違いない。然し何事もなかった。昨日老職に答えた扶持差引に就ただけでも何か掇当があるだろうと思つたのに、それさえ沙汰なしで退出時刻が来た。やれやれ今日はまず厄逃れか、——荷を下ろしたような氣持で、屋敷へ帰ってみると、驚いた。仕切り塀に沿つて柵のように立っている十二本の椎の枝へ、何十何百という紙切れがひつ懸つて、それが夕風にひらひらがさがさばたばたと鳴り翻がえっているのだ。弥太夫は棒立ちになった。「風でございます、——」阿波照藏はこう答えた、「お隣りで朝つから風を揚げまして、揚げては

ひつ懸け揚げてはひつ懸け致しまして」「あれが——」「みんな風でございます、尤もひつ懸けるのが目的だとみえまして、手作りの粗末なものの許りですが」「——みんな風」弥太夫はこう喧やきながら、昨夜の失敗も元を糺せば隣りの悪戯からだ、然も視よ、十二本の椎の樹に幾千百となくひつ懸つた風の、ひらひらがさがさ嘲笑し愚弄する有様を、——もう沢山だ、これを黙っているとしたら腰抜けだ、決算をしよう。弥太夫は解きかけた袴の紐を結び直し、断乎たる決意を眉間に刻みながら出ていった。

「どちらさまでございますか」玄関へ出たのは若い女であつた。「隣りの折岩弥太夫という者です、御主人にお眼にかかりたいからと取次で下さい」「少々お待ち遊ばせ」ながいしめを呉れて立つていったが、その儘なかなか出て来ない。奥の方で女達の笑う声や、廊下を往き来る足音が賑やかに聞える。余りおそいのでいらいらし始めた時、漸く女が戻つて来た、「とりちらしておりまして失礼ですがどうぞ」そしてにっこり媚びながら案内に立つた。廊下を曲つて広縁に出る、四つめの、十帖ばかりの客間へ通されたが、入ろうとした途端に、弥太夫は幽霊でも見た様に「えっ」と奇声をあげながら立竦んだ。そこに坐っているのは烈女の中の烈女、実に老女波尾女史であつた。「やあどうも」弥太夫は慌てて引返そうとした、「昨夜はどうも」「どこへいらっしやいますの」「部屋が、部屋が違つたようですか

ら」「はて」「私はこの家の主人に会いに来たんです、きつと召使が間違えたんでしよう、失礼しました」「召使は何にも間違えはしませんですよ」「すると貴女もお会いになる訳ですか」「誰とですの」「誰とって勿論此処の主人とですよ」「そんな必要はございません、わたくしがこの家の主じですから、——」弥太夫は口をあけた。「あ、な、た、が」何時か家僕が隣りの門札には波尾とあると云った、だがよしんば波尾にしても、まさか波尾女史とは、よもやこの烈女とは。——波尾ゆゑ、女はにっこり笑つて、「おわかりになつたらお坐り遊ばせ、御用というのを伺い申しましよう」疑がう余地はない、彼は示された座へ坐りながら賽は投げられたりと唸つた、「で、——御用件はどういう事でございますか」「ひと口に云えば」「そんな必要は少しもございませんわ、どうぞ落着いて百口でも千口でも仰しやりたいだけ仰しや下さい」「勿論それは、私としても」「ちよつとお待ち遊ばせ」女史はこう遮ぎつて向うを見た、「支度ができたら持つておいで」「はい——」隣りの部屋でこう返辞が聞えると、二人の女中が酒肴の膳を運んで来た。弥太夫は手を上げた、「とんでもない、どうかそんな心配はやめて下さい」「何をですの——ああこれですか」女史はほほほと笑つた、「これなら遠慮には及びませんわ、貴方に差上げるのはございません、わたくしがいたでくんですから」「食事だけは時刻どおりにいただく習

慣ですの、どうぞお構いなく用件を仰しや下さい、たべながら伺いますから、御免遊ばせ」熊沢蕃山という強情者は憂き事のおこの上に積れかし限りある身の力ためさんなどと敦固いたが、いま弥太夫の置かれた位置に立つても果してそう嘯ぶく事ができるだらうか。弥太夫は籠手を取られ胴を突かれ面を打たれた。死球を喰つて三振の宣告をされたようなものである、もう唸るくらいでは追付かない、彼は旗を巻き馬標を伏せた。そして坐り直した。

七

「貴女がこの家の御主人とすれば、私の持つて来た用談はここへ出す必要がなくなりました」正直にこう云つた、「それだからといって、勘定奉行としての私の態度が少しでも軟化すると思つたら間違ひですよ、軟化どころか大いに硬化するかも知れない、病氣は早い内に治せといひますからね」「何のお話しかわたくしにはとんとわかりませんわ」彼女は悠々と自から盃に酒を注いだ、「——何、誰か御病氣なんでございますか」「そうです、我儘横暴という病氣です、治療法は一つしかないという奴です」「その治療が利けばようございますわね、下手にしますと薬が副作用を起したり、余病が出たり致しましてよ」「有難うその積りでやりましょう」弥太夫は言葉をついで、「それから